

に鬪牛の時刻にもなりければ、村人各々彼此に繫置たる牛共を、漸々に牽もて出して迭に勝負を決せしむ、その事の爲體、今相撲の土苞入、攬組といふものに異ならず、且その牛と牛とを鬪するとき、東は某村のム右衛門、西は甲村の乙兵衛と呼はり名告て、看官にこれを知しむ、初は形體巨大からず、膂力飽まで猛からざる牛をもてこれを鬪し、中は大ならず、又小ならず、強からず、弱からぬ、前頭たる牛を鬪し、後は大關小結と唱らる、大牛の強勢なるを鬪すること亦是の相撲の如し、既にして一番二番と、勝負を争ふものを觀るに、且東西より牛主、各一頭を牽もて出して、牛と牛と相距ゑむこと、その間若干丈、力士等牛廻を解放てば、雙方齊一奔蒐りて角を突合するもあり、或は迭に疾視て、左右なくは蒐らず、相違ること數回にして、やうやく相近づくとき、突然として額を合し、角を膝て推すもあり、亦牛廻を解くとそが儘、一隻の角をもて、田を鋤き圃を打ごとく、大地を數間鑿り進みて、角を鬪する牛もあり、又敵を見て進み得ず、俄然として逃るもあれど、大かたは牛廻を解くと、そが儘相進みて、角を鬪する牛多かり、迭に膂力の捷れし牛は推戻し衝返され、漸に眼中含血まほらて、朱を注ぎたるもの、如く、全體より汗を流して、四箇の角を鬪する音憂々として遠く聞えたり、掎角の勢ひ怕るべし、又手段ある強牛どちは、組では離れ、はなれては突く、その勢ひ迅速にて、もし舛て突外さば、忽地眉間を劈かれんと、見る目危く思ふものから、よく煅煉して、慾つことなし、就中大牛の膂力大象に敵するものは、角を以て投仆し、更に又角をもて突殺すべく見えたるとき、力士等群蒐推隔て、捷誇りたる牛を駐む、事及ずして挂ざれば、負牛は唐を突れて、矢庭に斃れざることなし、○中略、實に是北國中の無比名物、宇内の一大奇觀也、この牛の角突の事は、次團太が物がたり、○下略

〔本朝食鑑十〕牛訓字之

○中略

膽。黄牛氣味古謂苦寒無毒、主治驚風、黃症、除熱、殺蟲、收癰腫、